出会って３回目で結婚した夫婦

スピード結婚

恋とは突然落ちるものと言うけれど、出会って 3 回目で結婚するとは驚きだ。私にとって、ネパールの人びとの恋愛及び結婚事情は漫画のように非現実的だ。聞き取りの合間の空いた時間に親しくなった人びとに結婚したきっかけを聞いてみたところ、地方都市や農村では数回会っただけ、あるいは１回会っただけの相手と結婚した人が多くいる。30 歳を過ぎても独身である自分との違いにひどく驚いた。

私がネパールの人びとの結婚事情を考えるきっかけをくれた人物は、ネパール中央部のチトワン郡で２日間限定という約束でアシスタントをしてくれた男性だった（写真①）。

写真①調査地近くの川で

2013 年 1 月に初めて私はネパールを訪れた。右も左も分からず、同じ研究室のネパール人学生に彼の知人をはじめに紹介してもらって調査を実施した。その後は、そこでの調査が終わると一緒に調査をした人から自分の研究を手伝ってくれる人を紹介してもらうという方法で人脈を広げ、調査を進めていった。今回話題にする、会って 3 回目で結婚した男性もそうして知り合ったアシスタントの一人である。彼は、その地域の有力者だった調査協力者が連れてきた、日本に留学中でお祭りを親族と共に過ごすために一時帰国していた日本語も話せる２０代前半の男性だった。最初はありがたく感じたが、よくよく話を聞くと、なんと彼は数日前に結婚したばかりの新婚だった。申し訳ないとは思いつつ他に頼れる人も居なかったので、彼に助けてもらいながら聞き取り調査をしていた。空いた時間に彼と話しているうちに、自然と彼の身の上話を聞くことになった。彼は日本の私立大学に留学し、学位の取得を目指しているという。今では、学業よりもその合間に生活費を稼ぐために始めたラーメン屋のバイトに夢中で、大学を卒業したら日本でラーメン屋を経営したいと考えるようになったと将来の夢を語っていた。思わず、「勉強をしに行っていると思っている親御さんが悲しむよ。しかもネパールに帰らないのを知ったら、親御さんは寂しがるよ。」と突っ込みを入れてしまった。しかし、彼が言うには、日本にはネパ

ール人が多く暮らしており、同じように大学に入学したものの別の仕事を見つける者も多くいるので、自分が特別ではないという。ご両親にも帰国の意思がないことを既に伝えているとのことだった。日本に住むことを彼の両親は反対しなかったが、せめてネパール人の女性と結婚してほしいと考えたようである。彼が春期休暇に入ったので、久しぶりに実家に帰ったところ、家族からお見合いをするように勧められたという。今の奥さんが２人目のお見合い相手で、３回目に会った時にプロポーズしたようだ。さらに言えば、実際に会ったのは初回のみで、残りはスカイプを利用しての会話であり、プロポーズもスカイプを通して行ったらしい。プロポーズを人生に一回の大切な行事と考える多くの日本人女性が聞いたら、怒り狂うような方法である。私がされたとしても怒るし、やり直しを求めるだろう。彼の奥さんと会う機会があったので、スカイプでプロポーズをされた時にどう思ったかを尋ねたところ、ニコニコと微笑みながら、「彼はハンサムで好みのタイプだったから、嬉しかった。」と片言の英語で答えた。英語がうまく話せないから細かいことを伝えられなかったのかもしれないが、スカイプでプロポーズされたことによる不満はないようであった。何より、深く知らない相手と結婚することに対する不満や不安は全くと言って良いほど見受けられなかった。結婚するまで彼女は地方の農村にある実家で暮らしており、高校を卒業した後は家事手伝いをしていたそうだ。はっきりとは言葉にしなかったが、学校に行っていたころに恋愛はしていたようであった。アシスタントの男性も、今まで何人かの女性と付き合っていたとのことだった。奥さんは20代前半で、親が結婚適齢期となった娘に見合い話を持ってきて、私のアシスタントをしてくれた今の旦那さんと結婚したとのことだった。なんと出会ってから結婚するまでの期間は１週間ほどしかなく、正にスピード結婚だったそうだ（写真②）。ちなみに、一人目のお見合い相手は、１回会った時に好みの外見ではなく、話してみて合わないと思ったらしい。

写真②象の上でデート

出会って３か月で結婚したという先輩の話を聞いてスピード婚だと思ったが、それよりもはるか

に短い期間で結婚を決断したわけだ。私には、物事の優先順位の第一位が恋愛で仕事よりも趣味よりも恋愛が大切、むしろ趣味や生活の最上位に恋愛があり、常に彼氏が居ないと精神が不安定な状態となり生きていけないと自称する女友達がいる。そのような彼女でさえ結婚の話になると現実的になり、一緒に暮らしたら合わないことがあるから同棲した方が良いとか、１年くらいは付き合わないと DV を隠しているかもしれないので不安だなどと話していた。日本では結婚するまでに良く相手を見定めるのが一般的だと思う。昭和までは親の一存で結婚相手が決められることもあったが、今ではよほどの良家でもない限り、自由恋愛が主流だろう。

写真③恋愛の話を良くした村

写真④恋多きおばあちゃん

お婆さんの恋愛観・結婚観

しかし、ネパールではお見合いで紹介された相手と数度会って、あるいは数日で結婚するのが、決して珍しくないことがわかった。話を聞けたのはほとんどが女性たちで、それは 10 代後半であっても 50 代であっても変わらない（写真③）。

孫がいる穏やかな気性のお婆さんにお爺さんとの出会いを尋ねると、やはりお見合い結婚で会ったその日に結婚が決まったと教えてくれた（写真④）。

私が「初恋の人が旦那様なの？」とたずねると、お婆さんは「それは豊かな人生ではないね。ちゃんと恋愛をしないと魅力的な女にならないよ。旦那が浮気をしてしまう。」と答えた。私が、「じゃあ、旦那さんの前に付き合った人がいたの？その人とは結婚しないの？」とたずねると、「村に恋人

はいたけれど、彼とは血が近いから結婚できなかった。でも恋愛は自由。内緒だよ。」と教えてくれた。どうやら、お婆さんにとって恋愛と結婚はまったく別物らしかった。

少女のカーストを超えた恋愛事情

広域調査で出会った 10 代半ばの少女の恋愛話は興味深かった。彼女は同級生と熱愛中らしく、暇があれば彼氏と LINE でメッセージを送りあっていた。また、その子の部屋に泊めてもらっていたので寝る前に良く話したのだが、彼女の話題は、大抵彼氏についてだった（写真⑤）。

写真⑤十代のネパール人

どうやら初めて出来た彼氏らしく熱をあげているようで、「彼から○○と言われたけど、どうしたら良いかな？」と恋愛経験がそうあるわけではない私に年長者というだけでアドバイスを求めてくる姿は可愛らしかった。ある日、お世話になっていた家のお母さんと娘たち、近所のおばさんたちで畑のトマトを収穫していた。女性ばかりで男性の目がないので、自然と旦那の愚痴や恋愛話になった。そんな中、少女の携帯にラインメッセージが入った通知音が聞こえた。私は、「彼氏から連絡きたんじゃない？返してあげたら？」とたずねると、彼女は自分の母親の方をちらりと見て、「駄目よ。お母さんがいるもの。付き合っているってばれたら殺されるわ。」と答え、携帯をマナーモードに設定した。その時、彼女は英語で私と話していたので、母親に会話を理解される恐れはなかった。その日の夜、少女に、「お母さんには彼氏がいることを内緒にしているの？婚前に彼氏がいるのは良くないことなの？」とたずねてみた。彼女が言うには、彼氏が居るのもあまりよくないことだが、母の怒りに触れる決定的な理由は彼のカーストが自分より下であることらしかった。彼女は、「私に下位カーストの彼氏が居るなんて、お父さんとお母さんに知れたら殺されるわ。絶対に二人には言わないでね。お姉ちゃんや妹しか知らないんだから。」と頼んできた。そこで、私は、「いいよ。でも、もし結婚しようと思うんだったら、いつか言わなければならないよ。」と言ってみた。この地域の結婚する年齢は 10 代後半で彼女も大学に行く

気はないとのことだったので、あと２年ほどすれば嫁ぐことになる。彼女は、「結婚は出来ないわ。でも、結婚はまだ先だもの。それまでは彼と一緒に居たい。」と答えた。私は今だけでも彼氏と一緒に居たいと訴える彼女の健気さに感動するとともに、結婚できないと考えていることを切なく感じた。しかし、その村での調査を終えて、他の民族が暮らす村に移り、その時の話を４０代の３人の子供をもつ女性にしたところ、彼女は困ったように笑いながら、「それは普通のことよ。男も女も若いうちは、親に隠れてこっそりと恋愛するのよ。でも結婚適齢期に入ったら、親が勧める人と結婚して家族になるの。あなたの友達は普通の経験をしているだけよ。」と教えてくれた。彼女も若いころは親の目を盗んで市場に野菜を売りに行く度に彼氏と会っていたらしい。

ネパールの恋愛と結婚

ネパールは多民族国家で様々な民族が暮らしている。民族によって、ヒンドゥー教を信仰する民族と仏教を信仰する民族に分かれる。双方の宗教ともにネパール独自の特性を帯びている。また、ネパールにはカーストが存在しており、現在でも異なったカーストとの結婚は困難なことが多く、民族や宗教によっては結婚できないこともある。そのため、恋愛は自由であるが、親族が勧める相手と結婚する方針あるいは文化が出来たと思われる。もちろん純粋に恋愛結婚をした人も多く、中には３年間の恋愛関係を経て結婚した夫婦もいる。都市ではより自由恋愛で結ばれる夫婦が多く、恋愛と結婚が直結しているようであった。民族や居住地、個人によって、恋愛と結婚は別と考えるか、恋愛を結婚にいたるまでの道のりと考えるかは異なるようであった。しかし、いずれの夫婦も家族という集団を守る同志として信頼しあっているように見えた。

砂野唯（すなのゆい）